

お糸地獄

これはお糸地獄と呼ばれ、地獄は「温泉」と「地獄」の二つを意味する。地域の伝説によると、1800年代後半、島原城の近くにお糸という名前の裕福な女性が住んでいた。お糸（Oito）は、愛人の助けを借りて夫を殺したかどで告発され、有罪となり死刑宣告を受けた。死刑執行の瞬間、地の底からぶくぶくと音を立てて地獄が現れたことから、お糸の最終的な運命を示している。

キリスト教殉教者のモニュメント

お糸地獄の上の丘に、キリシタン殉教碑（キリスト教殉教者のモニュメント）がある。明治時代（1868年 - 1912年）にそこに立てられ、モニュメントには1620年から1630年に雲仙で拷問され殺された、およそ33名のキリスト教徒を後世に伝えている。

キリスト教は1500年代半ばに日本にもたらされ、九州で盛んになった。長崎はキリスト教信仰の拠点となり、島原半島の領主有馬晴信（1567年 - 1612年）は1579年に改宗した。キリスト教は九州および日本で数十年間普及したが、1600年代初期に、この外国の宗教の運命が変わった。当初キリスト教は、ヨーロッパ人と関係を築き火器や貿易品を得るために必要だと考えられている一方、外国勢力による植民地化の手段だとも考えられていた。そのため、宣教師は追放され、改宗者は処刑され、宗教そのものが禁止された。

1627年から、島原半島じゅうから多くのキリスト教徒が雲仙に連れて行かれ、信仰を捨てるまで地獄（温泉）で拷問された。殆どが棄教せず、その犠牲を見た雲仙の人々は、キリスト教の禁止が解かれて間もなく、犠牲者たちの信仰の強さを後世に残そうとした。

この日本史の暗黒の期間が、作家の遠藤周作（1923年 - 1996年）に、1966年に『沈黙』という小説を書くための着想を与えた。この物語はマーティン・スコセッシ監督によって2016年に映画化され、いくつかのシーンが雲仙地獄で撮影された。現在、

島原半島のキリスト教徒の受難は記念碑や慰霊祭を通じて敬われている。